

2017.11.29

◎技術情報—撥鏤（ぼちる）技法について

角元弥子さんより

日経新聞で象牙彫刻師の方が撥鏤技法を解説されていました。
ハンドリングゼミで何度か拝見し、技法について話題になりましたので、
記事テキストを添付します。
（紙面には再現された撥鏤の品の写真がありましたので、そちらも画像添付します）

皆さまのご参考までに。

象牙彫刻の神髄に近づく、古代の「撥鏤技法」復元めざし50年以上研究、
村松親月（文化）2017/11/28
日本経済新聞 朝刊 42 ページ 1737 文字
書誌情報印刷

ヒーターの上で熱々になった真っ赤な液体に、象牙を入れて煮込むこと1時間。そろそろ頃合いだ。どれどれ——。

群馬県太田市で、象牙彫刻の職人をなりわいとしている。根付けなどの商品を作るかたわら、50年以上取り組んでいるのが「撥鏤（ぼちる）技法」の復元だ。象牙の表面を紅色などに染めてから、内側の象牙そのものの白色が見えるところまで彫り、図柄を浮き立たせるのが特徴だ。奈良時代に中国から伝わったが、次第に中国でも日本でも作られなくなった。

○ ○ ○

国宝展で心奪われる

中学を卒業してすぐ、象牙職人の父のもとで修業を始めた。父は体が弱く、子ども心に早く仕事を身につけなければと思っていた。それから1年半で父は逝き、今度は別の師匠に弟子入りした。

職人として独り立ちして根付けや帯留めなどを作るようになる。30歳を過ぎたころ、たまたま東京国立博物館の国宝展に足を運び、人生が変わった。目に飛び込んできたのは撥鏤技法で作られた鮮やかな紅色の尺。馬や鳥の図柄の白と背景の紅色の対比が美しく、一瞬で心を奪われた。千年以上も昔の品が、今なおいろあせぬ輝きを放つとは……。

制作工程はどの国にも残っていないと知り、幻の技法を解き明かしたいと思うようになった。とはいえ簡単ではない。なにしろ工芸品自体、正倉院宝物にしかない。作品写真の原板の入手すら難しいありさまだ。

○ ○ ○

天然染料を探す

最大の謎は染料だった。撥鏤の美しさは、彫りぎわにあらわれる紅から白に至る繊細なグラデーションにある。染料が深く浸透しすぎると、彫ったときに象牙の白が出てこず、逆に浅すぎるときれいなグラデーションにならない。天平時代にもあっただろう天然染料のなかから、色合いが近く、さらに、同じくらい浸透する染料を探し出さねばならない。

西洋茜（あかね）、蘇芳（すおう）、ラックダイ、コチニール——。考えられる限りを試した。温度やつけ込む時間によっても染まり具合がかわる。試行錯誤の末にたどり着いたのが、インド茜だった。80度に保ちながら1時間煮込むと、ちょうど良い深さに染まることもわかった。

細かい図柄は、彫刻刀で丁寧に彫り上げていく。最後に鳥の羽など、部分的に緑や黄色の色をのせる。奈良の正倉院展に夜行列車で何度も通い、実物を目に焼き付ける。そして細かい調整を繰り返していった。

1996年、研究成果を松濤美術館（東京・渋谷）で開かれた「日本の象牙美術」で発表し、その2年後、撥鏤尺などの復元作品や資料を奈良国立博物館に寄贈した。納得のいく作品ができるまで30年。長い長い道のりだった。

じつは、これで終わりではない。3年前、三井記念美術館（東京・中央）で開かれた「超絶技巧！ 明治工芸の粋」展に出かけてギョツとした。図録の解説で撥鏤尺について「つい最近、この赤色が臙脂（えんじ）で染められたものであることが報告された」との一文があったのだ。

慌てて奈良国立博物館に問い合わせると、撥鏤尺の染料を可視分光分析した資料を送ってくれた。その前年に「正倉院紀要」の中で発表されたものだ。そこには、正倉院宝物の紅牙撥鏤尺の表面の染料は臙脂との分析結果が記されている。

○ ○ ○

ようやく出た結論

もちろん、過去に臙脂での染色を試みたことはある。だが、色が浸透せず、表面しか染まらなかったはずだ。それから半年間、老骨にむち打ち、手を真っ赤にしながら実験を繰り返した。やはり表面しか染まらない。どういうことなのか——。

調べるうちに、臙脂の原料はコーティング材にも使われることを知った。とすれば、インド茜で染めた後に、コーティング代わりに臙脂を用いたのではないか。そう仮説をたて、実験を繰り返すこと半年。インド茜で染めたあと、臙脂の染料に30秒、さっとくぐらすことで、本物にかぎりなく近い色合いを出せることがわかった。これが現時点での私の結論だ。

50年近く研究に没頭してこられたのは、象牙屋としての使命感としかいいようがない。撥鏤技法の神髄に近づきたい、そして技法を後世に残したい。ただその純粋な気持ちに突き動かされて取り組んでいる。（むらまつ・しんげつ＝象牙彫刻師）

【図・写真】復元した「紅牙撥鏤尺」

<http://www.j-bunka.jp/infomation/28112017.jpg>

ジュエリー文化史研究会

<http://www.j-bunka.jp/>